別記様式４

令和６年２月

プラン名　　大山ブロッコリー®きらきらプラン
「WIN-WIN-WIN！未来につながるブロッコリー産地」

１　プラン策定主体名　　大山町

２　対象地区　　大山町全域

３　対象地区の現状

（１）大山町産ブロッコリーの経緯・状況・特徴

［産地の概要］

大山町のブロッコリーは、昭和 40 年代後半に中山地区の転作作物として導入され、主幹品目であった梨との労力配分が可能であったこと等から産地規模は年々拡大し、市町村別栽培面積では西日本一の産地を誇るほどに成長しました。

平成に入り、連作による病害の発生や米国産など輸入ブロッコリーの影響で一時低迷しましたが、この危機に対し、生産者や鳥取西部農協、卸売会社、行政関係者が協力し、出荷形態を縦詰めから横詰めへ変更し鮮度や国産を訴えるため葉付出荷を全国に先駆けで行うなどの先進的な取り組みを行い、この危機を乗り切りました。さらに、平成 12 年には、予冷施設（大山予冷センター）を整備し、集出荷の一元化を図るとともに、栽培面ではセル育苗による定植作業の機械化を推進し、一戸当たり面積が大幅に増加しました。この結果、平成 27 年には販売額が 14 億円を突破し、再び西日本有数の産地としての地位を確立させました。

平成 24 年にブロッコリーでは全国初となる地域団体商標を、平成 30 年には地理的表示（GI）保護制度を取得し、「大山ブロッコリー®」のブランド保護・強化を図っています。また、ＪＧＡＰ認証生産者の育成にも積極的に取り組み、年々認証者は増加し、今後も増加が期待されています。

さらに、高齢化で担い手が減少する中、収穫作業の負担をカバーするため、平成 30 年から「大山ブロッコリー・スイートコーン産地の生産構造改革プラン」を策定・実行し、出荷調製用冷蔵庫の導入による収穫時間の変更を行う等、出荷行程を変える取り組みも行ってきました。特に、出荷調製作業の軽減を図ることでさらなる産地拡大を進めることを目的に、全農とっとりが令和 3 年 4 月に町内に「野菜広域センター」（共同集出荷施設）を整備したことで、産地を取り巻く状況は大きく変わりつつあります。

［産地の特徴］

・大山山麓の水はけが良く有機質に富んだ黒ぼく土が広がる地形に加え、年間平均気温が約 15℃、昼夜の平均温度差が約 8℃と、ブロッコリー栽培に適した環境にあります。

・長年のブロッコリー生産により確立された手法に沿った厳しい目での栽培管理を地域で徹底し、高い品質を維持してきました。

・食味の良さ（青臭さやエグミが少なく甘味が強い）、鮮度の良さにもこだわり、夏場の一時期を除きほぼ年間を通じた安定供給が可能な産地として、市場において非常に高い評価を得ています。

［歴史］

1971 年	スイカの後作に中山地区でブロッコリー導入　軟腐病が多発
1980 年代	スイカの価格低迷、連作障害。ナシの転換作物としてブロッコリー産地化推進
1990 年代	アメリカ産輸入増。連作障害発生 中山地区面積　150ha→99ha まで減少　白ねぎへ転換
2000 年	輸入減少　中山地区面積　99ha→139ha　ナシに代わって基幹作物に 半自動移植機、自動施肥機導入
2011 年	味を追求した減化学肥料栽培に取り組む。 「大山ブロッコリー®　きらきらみどり」として出荷スタート
2012 年	地域団体商標登録
2015 年	販売額１４億円突破
2018 年	地理的表示（GI）保護制度の取得、既取得の地域団体商標とのＷ取得
2019 年	ＪＧＡＰ取得（個別認証）に取り組み、3 名の生産者が登録となる
2020 年	初夏どりブロッコリーより「ＪＧＡＰ大山ブロッコリー®」として出荷スタート

（２）「大山ブロッコリー・スイートコーン産地の生産構造改革プラン」の主な取り組み実績

大山町では、コロナ禍でやれることが限られる中、ブロッコリー部会やスイートコーン部会、鳥取西部農協、西部農林局（農林業振興課、大山普及支所）と協力し、様々な取り組みが行われています。コロナ禍で実績の数字として挙がっていないところもありますが、現場では関係機関が一体となった協議が行われるなど、確実な実行が進められています。

ア）担い手・新規就農者の確保に関する取り組み

就農相談については、大規模経営体の後継者など親元就農が中心であり、特に体制を整備しなくても十分に対応することができました。部会活動も活発に行っており、栽培年数の短い生産者へのフォロー、仲間づくりも行われています。今後は、新規就農者をどう確保していくかを、体制の検討をする必要があります。

経営指導については、「大山ブロッコリー経営モデル指標」を作成し、役員会等で周知を図るとともに、これを活用し若手生産者を中心に個別に我が家の経営分析を行うよう働きかけました。

女性農業者の支援については、コロナ禍で組織的な活動ができませんでしたが、令和５年度から有志の女性農業者に声をかけ要望に合わせた勉強会が一部で再開されました。

収穫作業の労働力の確保については、収穫機の開発と併せ、作業受託等の支援体制の検討が令和 5 年度から全農とっとりを交え進められており、今後、具体的な方針を検討していくことになります。

【ブロッコリーの新規就農者数の推移】

年度	H30	R 元	R2	R3	R4	計
新規就農者	4 人	2 人	2 人	3 人	1 人	12 人
認定新規就農者	1 人	―	1 人	1 人	―	3 人
その他（親元就農等）	3 人	2 人	1 人	2 人	1 人	9 人

イ）農地利用の効率化・維持管理に関する取り組み

農地の有効利用については、令和3年度から大山町人・農地チーム会議の検討課題に挙げ、新規就農者のほ場確保の検討や梨廃園跡地等遊休農地の再整備について、関係機関で協力し取り組んでいます。現場確認や当事者との調整に多大な労力を要し一気には進みませんが、下中山地区の梨廃園跡地をその周辺の遊休農地と一体的に解消するなど、一つ一つ実例を積み上げているところです。

排水対策や土づくりについては、大山普及支所が普及課題に挙げ、営農センター等と協力しながら効果確認や優良事例の紹介を行っています。

【遊休農地面積推移（ｈａ）】

年度	H30	R元	R2	R3	R4
遊休農地面積	89	84	81	82	81
耕地面積	3,970	4,060	4,050	4,050	4,020

※上段：大山町農業委員会調べ、下段：農林水産省調べ

ウ）生産振興に関する取り組み

過去に実施した二つの地域プランや農家プランなどに基づき、担い手や機械利用組合などにトラクターや定植機などの導入を進め、規模拡大や作業の効率化の支援が行われてきました。これにより、担い手農家を中心に規模拡大は確実に進んでおり、生産者の高齢化や減少に伴う産地規模の縮小の歯止めに一定の寄与をしています。

また、収穫時間の緩和については、前プランで出荷調製用冷蔵庫の導入を進めた結果、夜間の収穫作業から解放されるなど、大きな改善が図られています。

現在、大きな問題となっている収穫作業の労力不足については、収穫支援体制と収穫機の開発協力の両輪で進めていく必要があります。収穫機は開発業者に協力し現地実証を進める方向で調整が行われています。収穫支援体制の検討については、今後、部会や鳥取西部農協、全農とっとり等で協議していく必要があります。

農家は栽培規模や労力等を考慮し、共選と個選への出荷割合を決定しており、経営安定や労力の有効活用に一定の効果を上げています。一方、野菜広域センターに出荷したブロッコリーは、全農の分荷等の問題で「大山ブロッコリー®」という名称が使えないなどの課題が浮き彫りになっており、解決に向け引き続き協議が必要となっています。

エ）販売及び産地PRの取り組み

消費拡大活動については、コロナ禍で思うように実施できなかったですが、「大山ブロッコリー井戸端会議」を核として、販促活動等を縮小せざるを得なかった状況の中でも様々な取り組みを行い、ブランド力の向上や消費拡大を図ってきました。

【大山ブロッコリー井戸端会議の主な実績】

＜販売体制強化＞

○量販店とのタイアップによる消費拡大、新規需要開拓。

○「大山ブロッコリー®」こだわり商品のブランド力向上（ＪＧＡＰ・きらきらみどり）

＜消費宣伝活動＞

○消費宣伝資材の作成、活用（出荷ダンボール・ポスター・のぼり等）

○「大山ブロッコリー料理研究会」による新たな料理開発、メニュー提案

○知名度アップによる、マスメディアへの波及効果

（「満天☆青空レストラン」「くいしん坊！万才」）

○県内外での食育授業の取り組み　　など

地理的表示（GI）保護制度については、平成30年に取得し、既に取得している地域団体商標登録と併せ、これらを活用したブランドの強化や保護に更に取り組んでいくことが望まれます。

ＪＧＡＰについても、鳥取西部農協と大山普及支所が協力し、部会員への周知や希望者への個別指導を行っており、令和５年度末の取得者は５名となる見込みで、他の生産者に安全安心の意識啓発にもつながっています。販売面でも鳥取西部農協や部会の努力で一般品よりも高値で販売されており、今後のさらなる拡大が期待されます。

４　現状（情勢変化）と新たな課題

（１）産地概況

前プラン実施後の大きな変化としては、冷蔵庫導入農家の増加と野菜広域センターの整備があげられます。これは、収穫の時間帯（深夜作業から日中作業へ）や出荷調製作業の軽減を図ることで、個々の生産者が規模拡大を進め、最終的に産地の生産量の増加を目指した取り組みです。

規模拡大や雇用労力の確保など劇的な変化をもたらしていますが、一方で団塊の世代の生産者が 75 歳を超える状況を迎え、小規模農家・ベテラン農家を中心に、多くの生産者が高齢化、労力不足により、適期作業や全面積の収穫が困難になりつつあります。更に、重作業による体力不足や機械の老朽化等を理由に離農される方も見られ、面積や生産量が伸び悩み、このままでは離農の加速化により産地構造が急激に変化する懸念があります。

そこで、生産部は自主的に課題の聞き取りを行い、産地ビジョンの策定に取り掛かりました。産地ビジョンを作成する中で、共通課題として、①出荷数量の確保、②高品質生産、③ブランド強化といった意見が多くあがり、これらをより一層深堀し実施可能な対策から確実に実践するため、地域プランの策定に向け動き出しました。

【資料１】大山町におけるブロッコリーの生産と販売の状況

【ブロッコリーの栽培面積の推移（ha）】　☞面積は 400ha を維持。

区分	H25（10 年前）	H30（5 年前）	R 元	R2	R3	R４（現状）	対 H25 年比	
							H30 年	R４
中山	230.1	245.6	226.9	234.9	252	256.2	107	111
名和	85.2	104.5	102.8	101	104.7	86.4	123	101
大山	89.8	81.6	70.9	62.5	62.8	74.9	91	83
大山町全体	405.1	431.7	400.6	398.4	419.5	417.5	107	103

（鳥取西部農協調べ）

（２）担い手

ここ数年、一定数が親元就農しており、それらの多くが規模拡大を図っています。また、一部農家は安定した雇用の確保や従業員の福利厚生の向上を目的に法人化を進めており、令和４年度末時点で９法人がブロッコリー栽培を行っています。

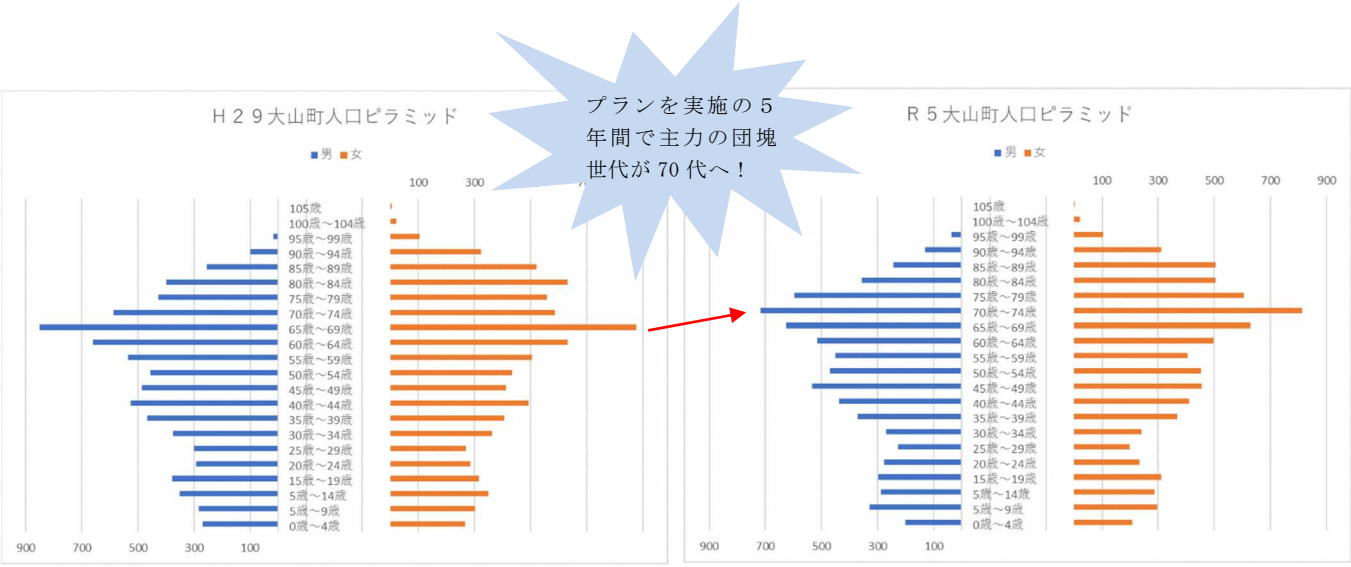
一方、規模拡大に必要な機械等の整備に伴う面積拡大で栽培管理等が追い付かず単収低下を招く等の事例も多く見られるようになりました。また、労力の確保が担い手を含めた産地全体の問題となっており、特に大規模農家にとっては、栽培管理や労務管理、金融機関等との財務協議、出荷・販売先との商談等を経営主に代わって行えるようないわゆる右腕となる人材の確保・育成が急務となっています。

【ブロッコリーの生産者戸数の推移】　☞5 年単位で１割減。今後も減少すると見込まれる。

区分	H25（10 年前）	H30（5 年前）	R 元	R2	R3	R4（現状）	対 H25 年比	
							H30 年	R４
中山	90	80	74	75	75	73	89	81
名和	48	43	38	39	40	40	90	83
大山	52	45	41	41	38	38	87	73
大山町全体	190	168	153	155	153	151	88	79

（鳥取西部農協調べ）

H29.4.1（前回プラン作成年度）と R5.4.1（今プラン作成年度）の大山町民の人口構成比較図



【一戸当たりの栽培面積の推移（ha）】　☞一戸当たりの面積が増加。

区分	H25（10 年前）	H30（5 年前）	R 元	R2	R3	R4（現状）	対 H25 年比	
							H30 年	R4
中山	2.56	3.07	3.07	3.13	3.36	3.51	120	137
名和	1.78	2.43	2.71	2.59	2.62	2.16	137	122
大山	1.73	1.81	1.73	1.52	1.65	1.97	105	114

（鳥取西部農協調べ）

【一戸当たりの単収（ｹｰｽ/10a）の推移】　☞面積増加に対して、単収は不安定。

区分	H25（10 年前）	H30（5 年前）	R 元	R2	R3	R4（現状）	対 H25 年比	
							H30 年	R4
中山	155.6	137.7	169.6	144.9	154.1	141.3	89	91
名和	126.0	92.2	126.3	87.0	101.0	125.0	73	99
大山	143.9	127.0	148.8	144.2	161.9	153.8	88	107
大山町全体	146.8	124.7	154.8	130.1	142.0	140.2	85	95

（鳥取西部農協調べ）

（３）出荷方法・出荷先の多様化

これまで、ブロッコリー部会では各生産者が段ボールに詰め、予冷センターで真空予冷後に出荷する方法（個選出荷）をとっていましたが、野菜広域センター整備によって発泡氷詰め出荷も可能となり、鳥取西部農協扱いで２種類の出荷方法が存在する状況になっています。

また、大規模法人を中心に直接市場等に出荷する経営体も増えており、さらに商系集荷業者の参入により産地として生産部会がまとまりづらい状況になりつつあります。

【現在の出荷形態】

	系　統　出　荷				直販
出荷先	鳥取西部農協 （生産者は段ボールで個選出荷）			全農とっとり （生産者はコンテナで持込み）	□直接市場 □商系業者
名称及び形態	『大山ブロッコリー®』 鮮度保持フィルム ＋段ボール	『大山ブロッコリー® きらきらみどり』 鮮度保持フィルム ＋段ボール	『JGAP 大山ブロッコリー®』 鮮度保持フィルム ＋段ボール	鳥取県産 発泡氷詰め	鳥取県産

（４）収穫作業

定植作業や防除等は機械導入により効率化していますが、収穫調製作業は人手に頼らざるを得ず、雇用や家族労力が確保できない生産者や加齢による体力不足により、収穫作業が間に合わない状況も見られ、今後は多くの生産者の問題になると予想されます。

産地全体として受委託体制の構築や収穫機械の導入を検討しておく必要があります。

（５）生産組織

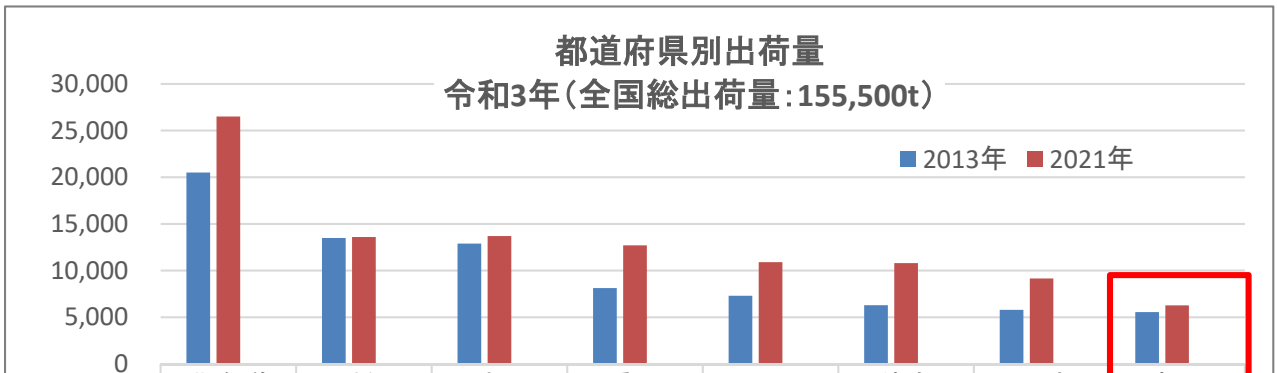
生産者の中で「大山ブロッコリー®」というブランドへの思いにバラツキが出始めています。コロナ禍で組織的な活動が難しく、この産地をどうしていくのかの議論が深められなかったことも要因と思われ、今一度、部会をはじめ関係者みんなで「大山ブロッコリー®」のこれからを語ることから始めていかなければなりません。

（６）競合産地（他県）の状況

ブロッコリーはたんぱく質やビタミンＣなどの栄養成分が多く含まれ、健康志向の高まりや調理の簡便さから近年消費量が急激に伸びている品目です。

これを受け、ブロッコリーの令和３年農作物産出額（出荷・販売で得る収入）は、平成 18 年比 182%と増加しています（R5.4.2 日本農業新聞）。特に西日本の競合産地では水田転作や多品目からの転換が進み産地間競争が激化しています。

こうした状況もあり、国は２年後の令和８年度からブロッコリーを野菜生産出荷安定法に規定する「指定野菜」に追加し、安定供給のために支援を拡充する方針を決定しました。これは、国としてもブロッコリーが国民生活に不可欠な野菜であると認めたことを意味し、今後、さらに生産量は拡大するだろうと考えられています。



	北海道	愛知	埼玉	香川	長野	徳島	長崎	鳥取
2013年	20,500	13,500	12,900	8,130	7,310	6,300	5,790	5,550
2021年	26,500	13,600	13,700	12,700	10,900	10,800	9,160	6,280
伸び率	1.29	1.01	1.06	1.56	1.49	1.71	1.58	1.13

長崎県：ばれいしょが価格低迷、高齢化で労力負担が少なく価格が安定しているブロッコリーへ転換。
香川県：レタスからの品目転換により平成29年現在、平成20年と比べて栽培面積は約3倍増加。
徳島県：ほうれん草からの品目転換により平成29年現在、平成20年と比べて栽培面積約4倍増、栽培者数約2倍増。
熊本県：い草の価格低迷・産地縮小による露地野菜重点品目4品目の中の1つとしてブロッコリーが設定。

野菜の面積増減ランキング
（作付面積上位20品目、2020年と10年を比較）

増加率順位	品目	20年面積(ha)	10年比
1	小松菜	7,550	24%
1	ブロッコリー	16,600	24%
3	タマネギ	25,500	6%
4	キャベツ	34,000	2%
5	レタス	20,700	▲1%
6	エダマメ	12,800	▲3%
7	ネギ	22,000	▲5%
8	トマト	11,400	▲7%
9	ハクサイ	16,600	▲9%
9	ヤマノイモ	6,930	▲9%
11	ホウレンソウ	19,600	▲11%
11	トウモロコシ	22,400	▲11%
13	ニンジン	16,800	▲12%
14	ジャガイモ	71,900	▲13%
15	ダイコン	29,800	▲17%
15	キュウリ	10,100	▲17%
15	サツマイモ	33,100	▲17%
15	ゴボウ	7,320	▲17%
19	カボチャ	14,800	▲18%
20	サトイモ	10,700	▲22%

（農水省資料を基に作成）　▲はマイナス

（７）コロナ禍からの再興

コロナ禍の3年半の間に産地のコミュニティ機能が低下し、産地のあり方や課題解決について深堀した議論ができない状況が続きました。また、人的交流の制限等により必要最小限の活動となるなど、産地の求心力が低下し、部会の組織としてのまとまりが弱くなった等の声も聴かれています。

コロナ禍からの再興を図り、生産者の高齢化による急激な産地構造の変化が加速するこの5年の間に、鳥取西部農協の「大山ブロッコリー®」の中核地区である大山町が先行して産地再興の取り組みを始め、今回の地域プランが産地全体の求心力となるように取り組みを決定しました。

（８）アンケート結果

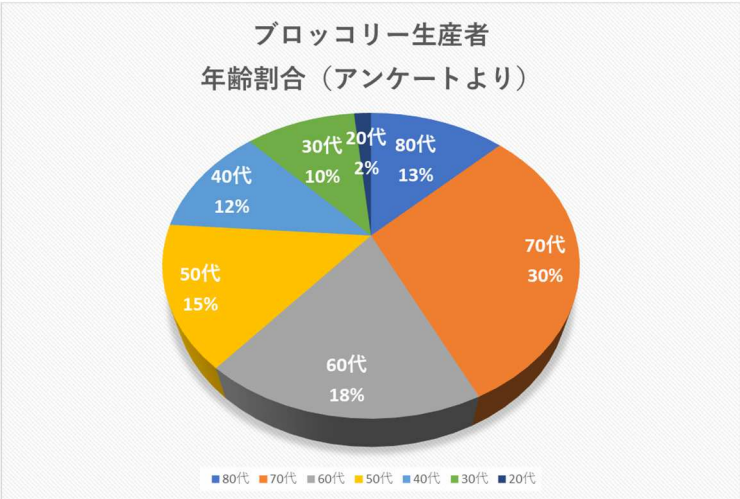
「大山ブロッコリー®産地振興」に係る意識調査アンケート

集計結果ダイジェスト(2/29時点)
［期間］　令和5年8月21日～令和6年2月13日

［回収率］　93.3%（計126名/135名）
大山：30　名和：39　中山：57

［平均年齢］　61.9歳

アンケート結果から、
70代以上が約40%を占めていることがわかります。



［後継者の有無］　いる：31 名　　いない：94 名　　無回答：1 名

［あと何年続けたいか］

1～5 年	6～10 年	11～20 年	21 年以上	無回答	10 年でやめる人
40.8%	24.2%	20.0%	13.3%	1.7%	全体の 65%

［ブロッコリー栽培で感じている具体的な**課題**は？］　一番の課題と思う項目◎二番目○。

	◎	○	計
① 収穫・調製作業に係る労働力が足りない	23	42	65
② 適期管理ができず反収が上がらない	3	28	31
③ 機械が古くなっている	12	40	52
④ 良い条件の圃場がない	5	25	30
⑤ 体力的にきつい	17	46	63
⑥ 単価が安い	26	48	74

（主な意見）
・生産資材の高騰による、収益の減少（圧迫）
・肥料・農薬等の価格上昇に単価が対応していない
・昔と違って、個々の農家だけでは対応しきれなくなっている
・経費ばかりあがり、収入単価は減っていく（広域含む）
・適期に防除を行なっても、秋冬での黒すすに困っている
・機械が欲しい、あれば増反したい。増反したいけど、機械がない…
・自分でできる範囲の栽培を心掛けている
・本当に儲からなくなった

［ブロッコリー部会の発展のために、**今後取り組むべきこと**は？］

	◎	○	計
① 単収向上に向けた栽培力強化	21	43	64
② スマート農業化（ドローン防除、管理表データ化等）	7	22	29
③ 選別自動収穫機の開発導入・共同利用	3	16	19
④ 身体負担軽減対策（腰痛対策等）	4	22	26
⑤ 作業受委託体制の構築	14	39	53
⑥ 野菜広域センター出荷物の大山ブロッコリー取扱実施	9	30	39

（主な意見）
・部会が弱体化、個人主義である
・良いものを作れば選別も楽
・他産地に真似できないことをアピール、真似できないことを行っていく
・販売強化、単価向上
・会員同士の交流、意見交換会など
・1 年中供給できる栽培を目指して技術開発を行ない、他産地に負けないよう更に品質向上を図る
・新規生産者の確保（商系出荷でない生産者、産地を育てる考えのある生産者）
・圃場の整備
・圃場の周囲に溝を掘る作業委託が欲しい
・最低単価を上げる。もしくは最低単価がないなら作る

５　プランの概要

（１）基本方針

本プランは、「大山ブロッコリー®」の持つ強みをさらに高めつつ、産地や生産者が抱えている新たな課題の解決を図り、5 年後、10 年後も安定して生産し続けるために取り組むべき事項を示したものです。

具体的には、アンケート結果や生産者との意見交換などから導き出した取り組むべき項目を「ものづくり」「ひとづくり」「地域づくり」の 3 つに分類し、優先順位を付けて再整理しました。今後 5 年間に生産者・生産者組織を中心に関係者が一つになり、儲かる農業を追求していきます。

【資料２】アンケート結果から見た産地の問題点と取り組むべき事項

［基本理念］

大山町が誇る基幹作物「大山ブロッコリー®」を守り続け、次世代につなげる
～儲かるブロッコリー栽培を目指して～

［概ね５年後の目標］

Ⅰ　販売額　　再び 14 億円突破を目指す
Ⅱ　10a 単収　目標平均単収 150 ケース、160 ケース以上農家の増
Ⅲ　若手生産者（50 歳代以下）の経営面積の拡大（一戸平均経営面積）　5ha⇒5.5ha
Ⅳ　きらきらみどり及び JGAP に取り組む生産者の増　毎年 1 人
Ⅴ　単価アップ　2,000 円⇒2,200 円
Ⅵ　新規就農者（新規出荷者含む）　毎年 2 人
Ⅶ　バトンタッチ制度登録者　　毎年 3 人

＜今回プランの項目と取り組み内容＞

取り組み内容

ものづくり　～生産量（単収）と品質 No.1 を目指して。
細部にまで気を配る農業技術の共有化と実践～

［生産性向上］
①栽培技術の見直しと迅速な情報共有（技術指導の強化）②外部労働力の有効活用
③規模拡大、農作業の省力化・合理化

［ブランド強化］～未来につなぐ「大山ブロッコリー®」ブランドの強化と組織の再構築～
①大山ブロッコリーサポート（井戸端）会議の再興　②「大山ブロッコリー」の有利販売の実現を目指した取り組み
③野菜広域センター出荷名称の検討

ひとづくり　～がんばっている経営体はこれからも元気に！
みんなでできる範囲で助け合って！

［担い手の育成確保］
①新規就農者の確保と育成　②経営感覚の優れた生産者の育成　③女性活躍の推進　④未来の生産者育成

地域づくり　～みんなで守る農地と基盤。丁寧な手続きで、一枚でも多くの農地を次代に～

［農地機械の有効活用］
①小規模農家やベテラン農家の営農持続支援　②農地の改善　③循環型農業の推進
④機械の共同利用、共同作業グループの育成

【前回プランの評価と今回プランの整理】

	前回プラン	評価	今回プラン
担い手・新規就農者の確保	①相談体制の確立	→親元就農による就農者は**増加** →リタイヤ経営体数の増加傾向が強まる中で、経営資産を引き継ぐ仕組みの構築は継続して必要	**【新規】** ○県農業経営・就農支援センターと連携、関係機関の情報共有体制を整備。 ○町民、県民、県外など相談者の状況に応じた、就農・研修を町のアグリマイスター制度と連携し実施。
	②経営改善のための自己診断の実施 ③後継者、新規就農者、新規栽培者や法人化に対する経営・技術指導	→「経営モデル指標」の策定と活用ができた	**【拡充】** 経営モデル指標(3 パターン)を活用した栽培・経営指導(栽培規模別の目指す栽培管理、所得等)の実施。
	④女性農業者の活躍促進	→コロナ禍で実施できなかったが、R5～大山普及支所が企画招集した活動が始まった	**【拡充】** 女性及び若手農業者が集える場の整備と勉強会の実施
	⑤担い手、新規就農者の経営規模拡大・早期経営安定のための労働力の供給	→コロナ禍で外国人労働力特別特区の活用はできなかった。 →R4～収穫機の検討や収穫支援の試験的な取組が始まった	**【新規】** ○1日農業バイトアプリの活用 ○収穫受託組織・仕組みの検討・実施 ○選別自動収穫機の開発支援
	⑦産地の魅力発信による担い手確保	→コロナ禍で県内外への PR 活動はできなかった	【新規】 ○後継者確保に必要な項目・要件の検討 ○就農サポート体制づくりなどの検討・実施
農地	①担い手育成機構・鳥取西部農協との連携による優良農地承継の体制づくり	→大山町人・農地チーム会議を核とした協力体制が機能している	**【拡充】** ○人・農地チームでの情報共有と検討 ○取り組み事例の情報発信 【新規】 バトンタッチ制度の検討
	②気象災害に強い産地づくりのための生産安定対策	→営農センターや大山普及支所を中心に実施	**【継続・拡充】** 各種実証試験と周知・PR
	① 土づくりの推進(堆肥利用)	→営農センターや大山普及支所を中心に実施	**【継続】** 町内産堆肥の利用促進支援 【新規】 土壌診断の実施 規模拡大に伴うほ場整備(ほ場進入路整備、センチピートグラス吹き付け等)
	①作業労力を軽減するための作業受委託体制の検討と機械整備 ②人的支援要望者に対する労力確保	(再掲) →コロナ禍で外国人労働力特別特区の活用はできなかった。 →R4～収穫機の検討や収穫支援の試験的な取組が始まった	**【新規】** (再掲) ○1日農業バイトアプリの活用 ○収穫受託組織・仕組みの検討・実施 ○選別自動収穫機の開発支援
	③ブロッコリーの収穫時間緩和策の検討・実施	→冷蔵庫の導入により作業負担の軽減が図られた **達成** **→未導入の一部の生産者から導入の要望がある**	**【継続】** 冷蔵庫の導入支援
	④共選施設の課題検討と出荷形態の見直し	→野菜広域センターの稼働	【新規】 ○「大山ブロッコリー®」の名称使用に係る具体的検討(法制度上の可否、補助事業上の可否、施設運営上の課題、販売上の課題等) ○処理能力解消対策の検討
販売とＰＲ	①JA組織力の強化 ③各種イベント等を通じた産地 PR 活動の実施	→コロナ禍でも、井戸端会議を中心に創意工夫をしながら消費宣伝活動が行われた	**【拡充】** 井戸端会議を核とした取り組みの再構築と活動の活性化
	②JGAP 認証取得の検討等による産地ブランド化の再構築	→JGAP 取得が進んだ。 →JGAP 規格のものは有利販売につながるなどブランド強化につながった	**【拡充】** JGAP、きらきらみどりの更なる推進

６　プランの具体的内容

＜ものづくり＞

（１）核となる品目の生産振興に関する取り組み

［生産性向上］

～生産量（単収）と品質 No.１の産地を目指して。細部にまで気を配る農業技術の共有化と実践～

変化する気象条件や進化する機械化に対応した細やかな栽培技術情報の蓄積とタイムリーな情報提供により、品質アップと単収向上を図ります。

具体的な取り組み計画

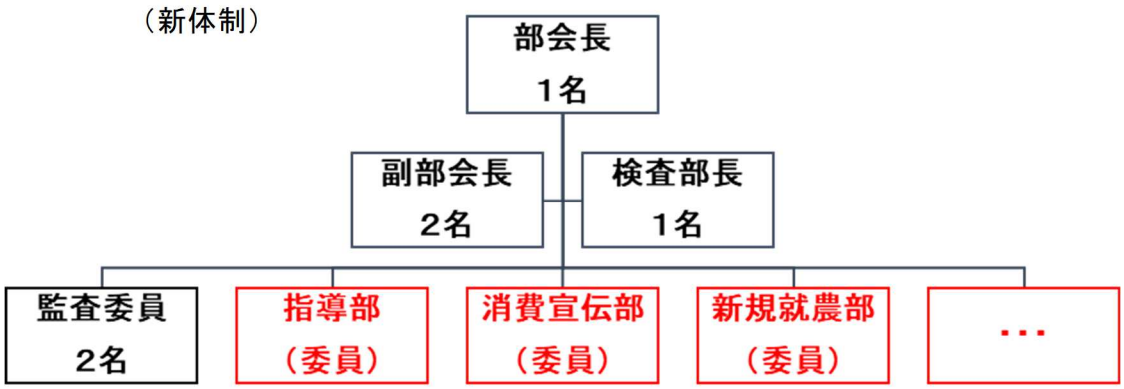
ア　栽培技術の見直しと迅速な情報共有（技術指導の強化）

ブロッコリー産地を取り巻く現状は、気象変動に伴う病気等により、単収が安定しづらく農家の所得が減っています。これからは天候等に左右されない安定した産地が求められています。

（ア）技術指導体制の強化

ブロッコリー部会の指導体制は、これまで地区の代表者としていた役員体制でした。今後５年間で「指導部」や「新規就農部」など専門部を創設し、部門ごとの役割に見直します。令和６年は、専門部の部長を配置し、例えば指導部では、部会主体の指導会や研修会の企画や立案を行い、生産者への情報提供の円滑化を図るなど各専門部の活動で産地課題を迅速に解決していきます。

【資料３】「鳥取西部農協ブロッコリー部会」（本部）部会体制の見直し



（イ）栽培技術を積極的に公開し生産部の活性化を目指す取り組み

夏季の異常高温や集中豪雨など、近年の異常気象が常態化しつつある気候変動により、病害虫、高温障害、湿害、茎空洞化の生理障害などの被害が増え、生産が不安定になっています。これまで役員を中心に試験等実施してきましたが、今後は試験数、種類、実施カ所を増やし実際に「見る」機会を設けることで試験結果を生産者まで共有していきます。また、省力化によりできた時間をさらに品質管理に割くことで大山町全体の栽培技術の改善を加速化する体制づくりを進めます。

・連作、気象変動に対応できる栽培技術の確立
・土壌分析・土壌診断に基づいた施肥体系の確立
・農作業の省力化

【資料４】栽培技術を積極的に公開し生産部の活性化を目指す取り組み

（ウ）ほ場の排水対策等

大山町内の水田転作ほ場では、排水対策を行う際に石礫が多数掘り起こされ、作業性の悪化や機械の故障等の原因となっています。石礫が表面まで持ち上がりにくいカットブレーカーや、石礫を破砕するストーンクラッシャーなどの実証試験等、また、バイブロソイラーやプラソイラーを活用した基本的な排水対策によりさらなる品質向上に努めます。

→ストーン
クラッシャー
による実演

（エ）緑肥新品種の利用体系の実証・確立

土壌の団粒化等の物理性、窒素の流亡抑制等の化学性、病原菌との拮抗等の生物性など土壌改良を進めるため、堆肥以外の方法として緑肥作物の導入及び裁断・すき込みの体制づくりを進めます。

（オ）情報発信の体制整備

新たな栽培管理システム（あい作）を鳥取西部農協に試験導入し、生産者と鳥取西部農協の間で迅速な情報の送受信ができる体制整備を行います。

【あい作の効果】

・手書きの栽培管理表の作成が、携帯電話・パソコンで可能（ペーパーレス・デジタル化）
・栽培作型の作成と編集、組合員の計画作成状況や集計情報が確認可能
・組合員の栽培記録や生育相談の確認が可能
・出荷申請の承認や栽培記録簿の印刷が可能
・組合員や職員への周知・連絡が可能
・栽培記録から収穫量や出荷傾向の比較・集計が可能

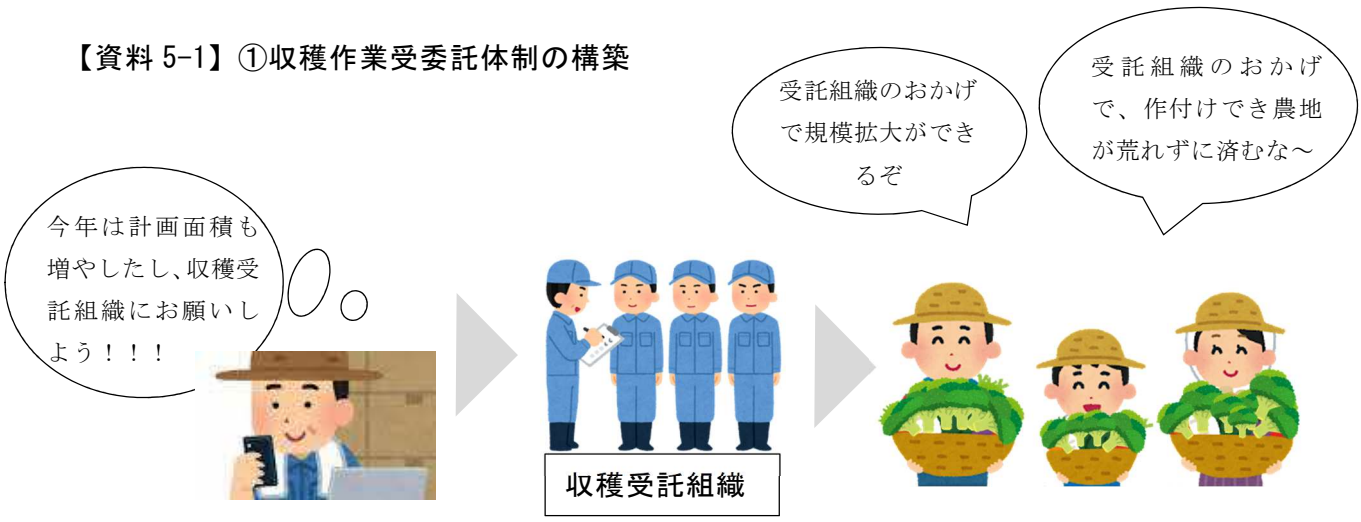
イ　外部労働力の有効活用

（ア） 収穫受託組織を活用した規模拡大支援

① 収穫作業受委託体制の仕組み検討

ブロッコリー部会や鳥取西部農協では前回のプラン実施期間から、収穫負担の軽減や受託体制を検討してきました。野菜広域センター整備を契機に、センターでも収穫作業の受委託体制の検討が始まったことを受け、ブロッコリー部会や鳥取西部農協でも選別自動収穫機の開発協力を含め全農とっとり等と連携・協力しながら体制整備を検討していきます。

【資料 5-1】①収穫作業受委託体制の構築



② 選別自動収穫機の開発協力（現地実証等による開発加速化への協力）

部会として現地実証調査のためのほ場提供や問題提起（作業効率、費用対効果、耐久性 etc）、解決策の提案等に協力するなど、大山町の作付形態に対応した開発の支援をします。

また、離農による農地の受け皿として既存経営体の面積の大規模化の支援策も必要で、需要の増えている加工用など出口戦略とセットで一斉収穫も含めた収穫作業の機械化を検討します。

【資料 5-2】②選別自動収穫機の開発協力

ブロッコリー選別自動収穫機実演会

産地維持・拡大の一助に

「あと２年で提供したい」

実演会でブロッコリーを収穫する選別自動収穫機＝大山町岡河内

鳥取県西部特産のブロッコリーの栽培について、生産者の高齢化や人手不足が課題となる中、JA鳥取西部と同ブロッコリー部会は14日、大山町岡河内の圃場でプロダクトソリューション（京都市）が国の委託を受けて開発している選別自動収穫機の実演会を開いた。ブロッコリー栽培の過程では、最も重労働な作業となる収穫だけが機械化できないため、関係者は課題解決の一助になると期待を寄せる。（田子倉崇）

JA西部、開発後押し

JA西部が今年、大山町内のブロッコリー生産者を対象に実施したアンケートによると、あと何年ブロッコリー栽培を続けるかとの質問に対し、「5年以内」と回答した生産者の割合は29％。高齢化している実態が浮き彫りになった。栽培面積はほぼ横ばいだが、若手生産者が次々と立ち上げるなどして維持しているのが救いだ。

種まきなどは機械化が進んでいるものの、収穫だけは手作業。アブラナ科は生育にばらつきがあって一斉に収穫ができない。生産者は一つずつ大きさを選別しなければならず、生産者と産地の維持・拡大に向けた最大の難関となっている。

こうした課題を踏まえ、将来の産地の姿を示すとともに同社の開発を後押ししようと、同部会などが実演会を開催。生産者や行政関係者、農機具メーカー関係者ら約70人が参加した。

選別自動収穫機は工場の自動化を手がける同社の技術を生かして開発。オペレーターが端末で操作し、自走しながらカメラで花蕾の大きさを自動認識し、設定した大きさのものは外装を切って収穫する。

実演を見た同部会の山本育司部会長は、収穫機が完成して収穫を続け、うまい企業が設立されることが望ましいとい、「行政にもぜひ見てもらい、収穫機の完成に向けて協力したい」と期待。同社の広畑恵一技術主任は完成に向けて収穫で傷ができないようにする仕組みやオペレーションの簡素化などが残っているとし「あと2年で提供できるようにしたい」と意気込んだ。

R5.12.18　日本海新聞

（イ）集中出荷など突発的事象への対応支援

アンケート調査の結果、72%の生産者が 1～2 人で営農を行っており、家族労力の確保が難しく、多くの生産者が収穫、調製作業に係る労働力不足を感じています。

天候等で突発的に人手が必要になった際、1 日農業バイトアプリ「デイワーク」等を利用し地域の人材活用に努めます。

【資料６】1 日バイトアプリ「デイワーク」等を活用した地元人材の有効活用

ウ　規模拡大、農作業の省力化・合理化

（ア）規模拡大等に必要な高性能機械・施設等の導入支援

生産者が減少する一方で、残った生産者が受け皿となり経営面積が増加傾向にあります。規模拡大に応じて農作業の省力化等のための真に必要かつ適正能力の機械、設備等の導入を進めていきます。

機械化支援等

例えば、、、
播種機・育苗ハウス・冷蔵庫
電動収穫台車・自動かん水装置
調製施設

（イ）スマート農業機械導入支援（先進技術、ＲＴＫ基地局設置の検討）

大規模農家を対象に過剰投資に留意しながら、規模拡大や共同利用に応じた自動操舵付きトラクター、農業用ドローン、直進アシスト付定植機等のスマート農業機械等の導入も支援します。

また、自動操舵付き農業機械の位置情報データの誤差が小さくなる「ＲＴＫ（リアルタイムキネマティック）」基地局の地域内への設置と運用について検討します。

ドローンによる薬剤散布

農林水産省_農村振興局
農山漁村振興交付金
フル活用のススメより

目　標　項　目	目　標　数　値	
	現　状 令和 5 年度	目標年度 令和 11 年度
10a 単収　目標平均単収 150 ケース	平均 140.2c/s/戸	平均 150c/s/戸
10a 単収　160 ケース以上農家の増	46 戸	50 戸
若手（50 歳代以下）生産者の経営面積の増加	5ha/戸	5.5ha/戸

※R4 出荷実績による数値

【目標】大山町内部会の平均単収　（単位：ケース/10a）

現状 R5 年度	R 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	目標 R11 年度
140.2	140	140	145	145	145	150

【目標】160 ケース以上の農家数　（単位：戸）

現状 R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	目標 R11 年度
46	46	46	48	48	48	50

【目標】若手生産者の経営面積　（単位：ha）

現状 R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	目標 R11 年度
5	5	5.1	5.2	5.3	5.4	5.5

（２）ブランド強化の取り組み

［ブランド強化］

～未来につなぐ「大山ブロッコリー®」ブランドの強化と組織の再構築～

「大山ブロッコリー®」のブランド要素の再確認から始める魅力発信と他産業とのコラボレーション等を活用した認知度アップを図ります。さらに、コロナ禍により希薄になった生産者間の人と人のつながりを強化し、部会・生産者の「大山ブロッコリー®」の意識を高めていきます。

具体的な取り組み計画

ア　大山ブロッコリーサポート（井戸端）会議の再興

（ア）全国規模の著名性の獲得～さらなる知名度アップを目指して～

観光分野や大山どり等の大山ブランド、レストラン等とのコラボレーションにより、県内外の消費地及び消費者への印象を深め、「大山ブロッコリー®」の知名度向上を図ります。

【資料７】「大山ブロッコリーサポート会議」の再興

R5.12.22
全国放送
朝の情報番組「THE TIME,」
にて大山ブロッコリーの
魅力をお伝えしました！

（イ）消費宣伝対策の強化

「大山ブロッコリー®」の栽培状況や部会の活動内容、就農者募集等、「大山ブロッコリー®」が身近に感じられる情報をインスタグラム等 SNS により提供します。

また、鳥取生協等との連携による収穫体験等の企画（2 回程度/年）など消費者交流会を開催し、消費者からの情報発信を促します。

・生産部主導による SNS 発信
・大山ブロッコリー®レシピのデジタル化
・マスメディアを使った PR 方策（大山町とゆかりのある著名人を起用）
・食トレンドに対応した商品開発

映え～！！！

（鳥取生協との交流会）

（ウ）取引市場・量販店との情報共有・連携強化

鳥取西部農協、部会を中心に、取引市場との情報共有や量販店での販売促進活動の交流を活発化し、産地の認知度を向上させブランド強化を図ります。

また、生産者や農協職員が量販店等消費地を訪問し、「大山ブロッコリー®」に対する消費者の評価を直接確認できる取り組みを増やします。消費者の評価を産地関係者が知ることにより、ブランド産地の自信や意識改革に繋げます。

イ　「大山ブロッコリー®」の有利販売の実現を目指した取り組み

（ア）特別な栽培技術、高品質な「大山ブロッコリー®」の拡大

（ＪＧＡＰ、減化学肥料栽培きらきらみどりの更なる推進）

「ＪＧＡＰ大山ブロッコリー®」や「大山ブロッコリー®きらきらみどり」の評価は高く、単価を高く設定出来るなど有利販売が出来ています。これらの出荷量を増やすための方策を検討し、「大山ブロッコリー®」全体のブランド強化を図ります。

【資料１】大山町におけるブロッコリーの生産と販売の状況

仲間の輪を増やそう！

JGAP・きらきらみどりに取り組みたい！でも難しそう？
と悩んでいる生産者のために、説明会を開催します！！！

⇒理解が深まったところで、さらに鳥取西部農協、
普及所を通じて支援していきます。

ふむふむ、、、
これなら私でも
取り組めそう！！！

大山ブロッコリー®で集荷されるブロッコリー

商品名	特徴	シェア
レギュラー品	大山ブロッコリーのうち、きらきらみどり、JGAPブロッコリー以外のもの	71.8%
きらきらみどり	化学肥料を通常栽培より70%減らして栽培したもの	13.5%
JGAPブロッコリー	JGAP承認を受けた農家が栽培したもの	14.7%

（イ）消費地における「大山ブロッコリー®」の特徴調査

「大山ブロッコリー®」は段ボールに入れ真空予冷をして消費地に届けます。他方、発泡スチロール氷詰め出荷品との比較調査のため、市場・仲卸等の協力を得ながら消費地の着荷試験を行い、品質の差や棚保ち、コスト計算等行いながら、さらなる品質向上に向けて検討していきます。

大山ブロッコリー®

鳥取県産ブロッコリー

ウ　野菜広域センター出荷ブロッコリーの名称検討

ブランド名称「大山ブロッコリー®」の活用方法の具体的検討

全農とっとりが運営する野菜広域センターでは、鳥取西部農協ブロッコリー部会以外の産地からの集荷もあり、「大山ブロッコリー®」の名称では出荷ができていません。多くの生産者がブランド名称「大山ブロッコリー®」の使用を望んでおり、一部の契約出荷先で名称使用など具体的な方法を検討します。

（課題・検討項目）

・法制度上の可否、補助事業上の可否
・施設運営上の課題、販売上の課題等
・鳥取県産ブロッコリーとの区分選果

～令和３年４月から稼働～

大山町ほか、琴浦など中部からの集荷もあり、大山ブロッコリー®との区分が必要です。

目　標　項　目	目　標　数　値	
	現　状 令和５年度	目標年度 令和 11 年度
・きらきらみどり及びＪＧＡＰに 取り組む生産者の増（1 人／年）	30 人 ・JGAP5 人 ・きらきらみどり 25 人	35 人
・単価アップ	2,000 円	2,200 円

【目標】きらきらみどり、ＪＧＡＰに取り組む生産者数　（単位：人）

現状 R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	目標 R11 年度
30	30	31	32	33	34	35

【目標】単価アップ　6kg/cs あたり（単位：円）

現状 R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	目標 R11 年度
2,000	2,000	2,000	2,050	2,100	2,150	2,200

＜ひとづくり＞

（３）担い手・新規就農者の確保又は共助体制の構築など地域農業の保全を確保する取り組み

［担い手の確保育成］

～がんばっている経営体はこれからも元気に！みんなでできる範囲で助け合って！～

経営規模の大小に関わらず、創意工夫や共助により、所得確保に取り組める体制をつくり、がんばっている人がこれからも元気で続けられるように、そして部会みんなで助け合える体制を整備し、産地みんなで元気になる取り組みを行います。

具体的な取り組み計画

＜新規就農者（新規出荷者も含む）＞

ア　新規就農者の確保と育成

大山町では、親元就農が多く、新規に営農を開始する人をサポートする体制が不十分です。今後ブロッコリー部会で新規就農の専門部を立ち上げ、相談体制を強化していきます。また、新規に創設する指導部や大山町のアグリマイスター制度との連携も行い、就農から独立後までの支援体制を構築します。

【資料８】大山町における就農希望者の受入・研修及び就農支援体制（検討中）

これからの取り組み

・県主催就農相談会への参加。
・関係機関と生産部（新規就農部）・アグリマイスターが協力し、相談者にあった研修体制を協議・決定。

＜既存経営体＞

イ　経営感覚の優れた生産者の育成

優良農家から得た情報を見える化した大山ブロッコリー経営モデル指標を用いて、生産者の営農・経営指導を行うことにより、大山町全体のレベルアップを図ります。

また、労働力にあった栽培規模の診断により、適正規模での単収を確保し、所得の向上へ導きます。

【資料９】経営感覚に優れた生産者の育成

モデル指標の活用

1　町内モデル経営体の労力・規模別経営収支　（円）

全体収支	認定農業者（5ha級・2人）	就農5～10年目（ヨーン含め5.5ha・2.5人）	大規模経営（10ha級・3人）
労力（人）	2	2.5	3
秋夏ブロ(a)	150	160	305
秋冬ブロ(a)	313	380	635
スイートコーン(a)		60	
ブロッコリー反収（ケース/10a）	187	171	161
ブロッコリー単価（円/ケース）	2,180	1,960	1,921
	出荷者はまだ！きらきらみどり		
販売額　①	18,798,000	21,990,000	29,248,000
組織公課	541,000	300,000	600,000
種苗費	655,000	790,000	1,170,000
肥料費	1,268,000	2,023,000	3,131,000
農具費	242,000	643,000	289,500
農薬費	645,000	1,341,000	1,145,000
諸材料費	248,000	310,000	68,500
修繕費	336,000	241,000	590,000
動力光熱費	502,000	378,000	485,000
作業衣料費	48,000	81,000	74,000
共済掛金	115,000		342,500
減価償却費	1,436,000	965,000	1,773,500
販売諸費	4,214,000	4,287,000	6,320,000
雇人費　②	24,000	410,000	3,000,000
利子割引料	6,000		7,000
地代賃借料	170,000	220,000	403,000
土地改良費			
資料料金	20,000		
出荷資材費	1,292,000	1,011,000	2,201,000
事務研修費	414,000	190,000	
支払保険料	267,000	78,000	273,000
雑費	48,000	306,000	447,000
経費合計　③	12,565,000	13,574,000	22,290,000
差引金額　④=①-③	6,233,000	8,416,000	7,058,000
専従者給与　⑤	3,600,000	1,110,000	3,000,000
青申控除額　⑥	650,000	650,000	650,000
所得金額　=④-⑤-⑥	1,983,000	6,656,000	3,408,000
総労働時間（h/年）　=総労働時間×面積×労力	3,264	4,573	6,834
主たる従事者一人当たり労働時間（h/年/人）	1,632	1,829	2,211
所得（円/h/人）　=[②-④]/労働時間	1,912	1,879	1,516

ベテラン農家から次世代へ

＜女性農業者＞

ウ　女性活躍の推進

女性農業者のきめ細かな視点はブロッコリーの栽培管理に十分に活かせられる一方で、栽培ほ場で活躍する女性農業者はまだまだ少ないとの意見が寄せられており、鳥取西部農協ブロッコリー部会支部役員からも女性農業者の活躍を期待する多くの意見上がっています。

女性の声を伝えるために

１．部会に女性の意見を反映するため、女性役員の登用を検討。
２．女性農業者の声を聴く会［Listening Love Broccoli（仮称：リスラボ）］の開催。

女性の声をもとに農業女子会の活動へ発展させます！

令和５年度開催
農業女子会「ロープワーク」研修→

＜未来を担うこどもたち＞

エ　未来の生産者育成

産地の維持・発展には若手の力が不可欠です。農業という職種に興味を持ってもらうため、大山町内の小中学校へ出前授業を行い、体験を通じて地域への愛着心を育てます。

大山小学校で出前授業を開催。
今後は、鳥取西部農協と生産部連携して取り組んでいきます！

目　標　項　目	目　標　数　値	
	現　状 令和５年度	目標年度 令和 11 年度
新規就農者（新規出荷者含む）の増加（1 人／年）	ー	10 人増

【目標】新規就農者数（新規出荷者含む）（累計）　　（単位：人）

現状 R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	目標 R11 年度
ー	0	2	4	6	8	10

＜地域づくり＞

（４）農地利用の効率化・維持管理に関する取り組み

［農地・機械の効率的活用］

～みんなで守る農地と基盤。丁寧な手続きで、一枚でも多くの農地を次代に～

優良農地をこれ以上遊休農地化しないよう地権者や耕作者の意見を伺いながら、農地の流動化を行います。また、面積が増えても効率的に管理できる仕組みや出し手と担い手のスムーズなマッチングなど優良農地が未来へ継承できる取り組みを行います。

具体的な取り組み計画

ア　小規模農家やベテラン農家の営農持続支援

（ア）バトンタッチ制度の仕組みづくり

小規模農家・ベテラン農家に一年でも長く営農を継続してもらうため、「大山ブロッコリーバトンタッチ制度」を創設し、規模拡大を伴わない場合でも、栽培に必需である小型機械等の導入を支援します。また、バトンタッチ制度により機械を導入する場合、農地や農機具、施設等を次の生産者に継承する仕組みを構築します。

・部会での中古農機具等のマッチング体制を構築

・バトンタッチ制度の創設

【資料１０】ブロッコリーバトンタッチ制度

『ブロッコリーバトンタッチ』制度

◇営農をしながら、機械を整備
（地域プラン事業で 100 万円程度の機械等に限る）

◇リタイア時期を気にせず、
機械導入ができる

◇マッチングは有償・無償など
双方合意により設定が可能

あと5年はブロッコリーを栽培したい。
老朽機械を高性能な機械に新しくして
少しでもラクしたい。
でも、体力に自信がなく導入に踏み切れない。

イ　農地の改善

（ア）優良農地の確保と整備

農地の有効利用を図るため、人・農地チーム会議の場を活用し、遊休農地等の情報共有と担い手への農地集約の議論を進めます。また、可能なところから遊休農地を改良し農地に再生します。

・農業委員等と連携した地権者及び担い手の意向把握

・遊休農地再生事業等の検討と実施

R4 年度農地再生事業実施後
雑木林がブロッコリー畑に
生まれ変わりました！

(Before)

(After)

（イ）規模拡大に対応した農地管理

経営規模の拡大に伴い、管理が必要な畦畔が増加し、除草作業の負担が増加しています。畦畔管理の省力化推進や負担軽減を図るために、畦畔へのセンチピートグラス種子の吹付、防草シート、ラジコン操作草刈り機やトラクター用アーム式草刈機等の導入支援を行います。

大山町内では既に集落営農組織等で
畦畔管理の省力化に取り組んでいます！

◎センチピードグラス
R5 年度　実績
・八重営農組合　3425 ㎡

←センチピードグラス（西洋芝）の種子吹付の様子

トラクター用アーム式草刈機による畦畔管理の省力化→

ウ　循環型農業の推進

（ア）町内堆肥の利用促進（耕畜連携体制整備）と導入支援

大山町では町内産牛糞堆肥の散布体制が構築されており、土作りを推進するため、引き続き堆肥の活用を推進します。また、町内には牛豚鶏が多数飼養されており、それらの堆きゅう肥が未利用になっているものもあります。これら未利用資源の有効活用について検討を進めます。

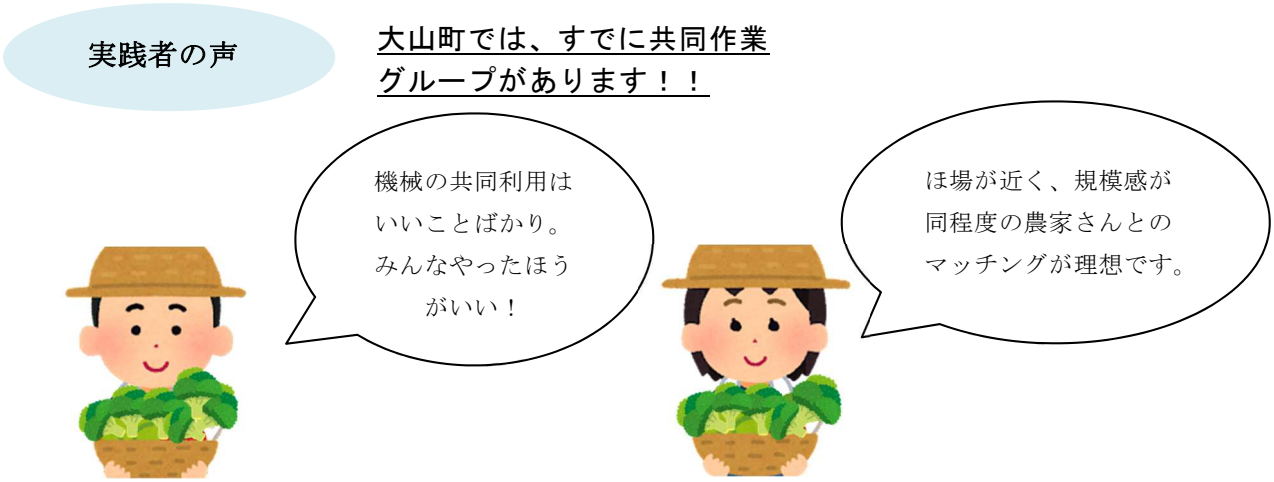
大山町内産堆肥の散布風景

エ　機械の共同利用、共同作業グループの育成

（ア）要望調査と優良事例の提示

機械の共同利用は、作業の効率化や機械の過剰投資がさけられるなどメリットが多数あります。

また、コロナ禍により希薄になった人と人のつながりを強化するため、共同利用の要望調査を行うとともに、優良事例を用いた啓発活動を行います。



（イ）マッチング、組織化支援、機械整備

部会内で希望する人どうしのマッチングと共同利用グループ育成を行うとともに、ブームスプレーヤー（防除に利用）や乗用２条定植機等の機械導入を支援します。

【資料１１】機械の共同利用、共同作業グループの育成

（共同による播種作業）

（ブームスプレーヤーによる薬剤散布）

目　標　項　目	目　標　数　値	
	現　状 令和５年度	目標年度 令和 11 年度
・バトンタッチ制度の登録者の増加（3 人／年）	―	15 人増

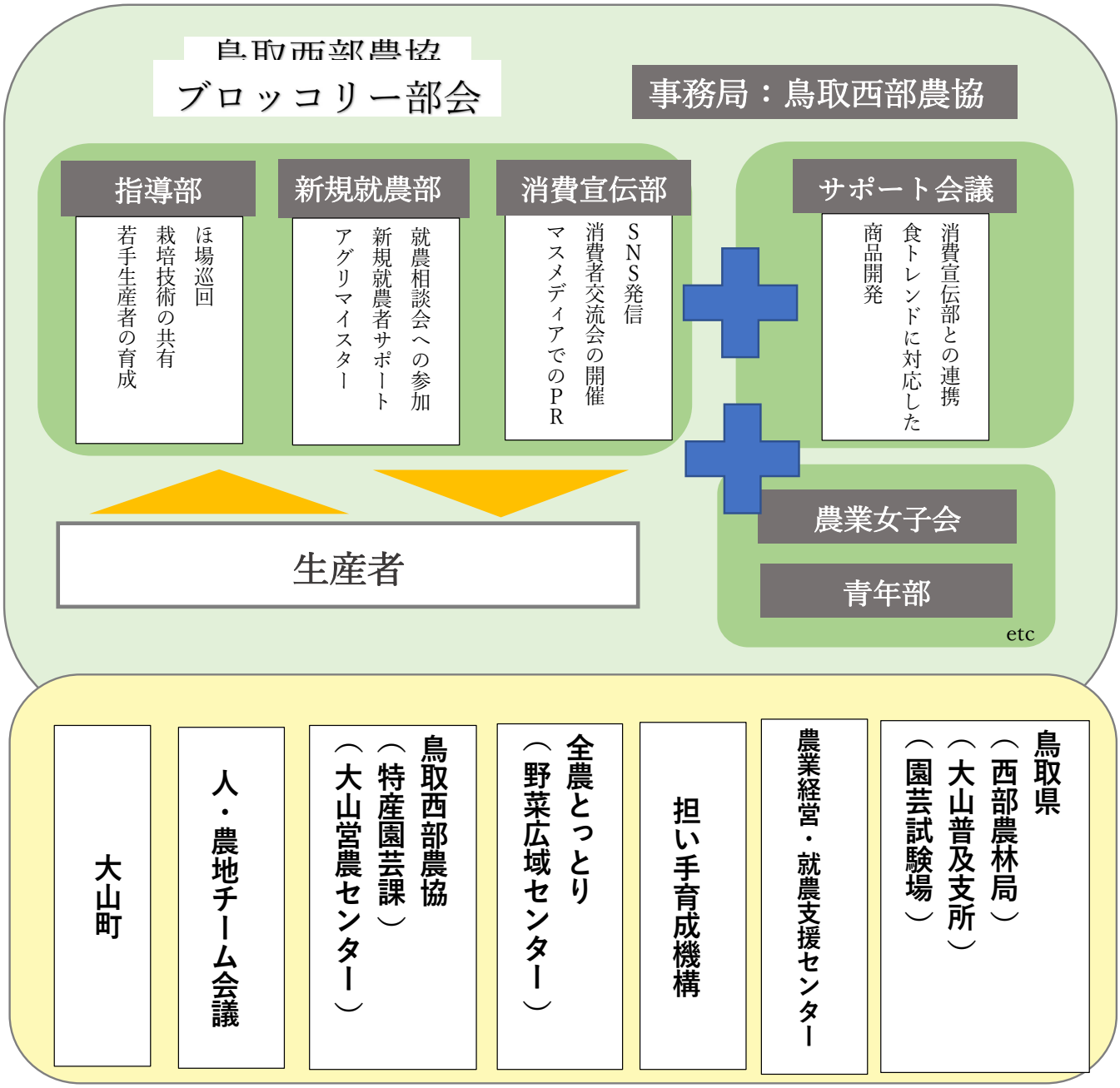
【目標】バトンタッチ制度の登録者数（累計）　（単位：人）

現状 R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	目標 R11 年度
―	0	3	6	9	12	15

7　実施体制図

きらきら輝くブロッコリー産地

Ⅰ　販売額　　再び 14 億円突破を目指す。
Ⅱ　10a 単収　目標平均単収 150 ケース、160 ケース以上農家の増
Ⅲ　若手生産者（50 歳代以下）の経営面積の拡大　5ha⇒5. 5ha
Ⅳ　きらきらみどり及び JGAP に取り組む生産者の増　毎年１人
Ⅴ　単価アップ　2,000 円 c/s⇒2,200 円 c/s
Ⅵ　新規就農者（新規出荷者含む）　　毎年2人
Ⅶ　バトンタッチ制度登録者　　毎年3人



８　プラン策定検討委員会構成メンバー

所属等	氏名
ＪＡ鳥取西部　ブロッコリー部会　部会長 〃　〃　副部会長 〃　〃　副部会長 〃　〃　監査委員 〃　〃　監査委員 〃　中山支所　ブロッコリー部　支部委員 〃　名和支所　〃　支部委員	
西部農林局　局長 〃　副局長兼農林業振興課長 〃　農林業振興課　課長補佐 〃　〃　係長 〃　西部農業改良普及所大山普及支所　支所長 〃　〃　普及主幹	
（公財）鳥取県農業農村担い手育成機構米子本部 農地業務主幹兼研修推進員	
ＪＡ全農とっとり　米子事業所　所長 〃　園芸部　園芸課　米子駐在	
鳥取西部農協　参事 〃　営農部　次長兼特産園芸課　課長 〃　〃　特産園芸課　係長 〃　大山営農センター　センター長 〃　〃　リーダー	
大山町　農林水産課　課長 〃　課長補佐 〃　〃 〃　主幹 〃　〃 〃　主事 〃　農業委員会事務局　局長	

オブザーバー

ＪＡ鳥取西部　中山支所　ブロッコリー部　支部委員	

９　支援事業の内容　※別紙

区　分	事業実施主体	事　業　内　容 （事　業　量）	事　業　費	実施予定年度
推進事業 （ソフト）	西部農協ブロッコリー生産部会 大山ブロッコリー井戸端会議	・品種試験 ・防除体系 ・排水対策 ・緑肥試験 ・土壌診断 ・「あい作」導入経費 ・選別自動収穫機の開発協力 ・サポート会議の活動経費 ・新規就農支援体制 ・遊休農地の再生 ・畦畔管理の省力化試験	1,550 千円 1,405 千円 2,160 千円 400 千円 5,000 千円 4,500 千円 4,000 千円 14,300 千円 1,000 千円 3,985 千円 1,700 千円	R6～R10
整備事業 （ハード）	西部農協ブロッコリー生産部会	・規模拡大等に必要な機械等の整備	60,000 千円	R6～R10
合　計			100,000 千円	

１０　関連事業（既存の他事業で対応予定のもの）

事　　業　　名	事　業　内　容	事　業　費	実施予定年度
産地生産基盤パワーアップ事業	・規模拡大等に必要な機械等の整備	100,000 千円	R6～R10
スマート農業社会実装加速化総合支援事業	・スマート農機等の整備	20,000 千円	R6～R10
園芸産地活力増進事業	・予冷庫ほか	100,000 千円	R6～R10
機構中間保有地再生活用事業	・遊休農地解消ほか	20,000 千円	R7～R10
しっかり守る農林基盤交付金（地域整備課事業）	・農地の改善	20,000 千円	R7～R10
産地主体型就農支援モデル確立事業		400 千円	R7～R10

１１　雇用の計画

特になし

１２　今後の大山町ブロッコリー産地発展に向けて

大山町でのブロッコリー栽培は 50 年以上の歴史があり、先人のたゆまぬ努力により西日本有数の産地に成長しました。この間、海外からの輸入攻勢、病害虫の発生、台風等の気象災害など多くの困難がありました。しかし、県や町、農業団体等の強力な支援を受けながら、生産者自らが創意工夫し、その困難を乗り越えてきました。一方、ここ数年、競合産地の台頭や価格転嫁が進まない中での経費の高騰により農家所得は低迷し、商系業者の進出やコロナ禍による組織活動の停滞により部会としてのまとまりも弱体化するなど、これまでにない逆風下に農家や生産組織はさらされています。

このような中、生産部役員が産地再興に向け、今後やるべきことを整理し、産地ビジョンとしてまとめられたことが、本プラン策定のきっかけとなりました。

アンケートではここ 5 年で 40%の方が、10 年で 65%の方が離農すると回答し、単価が安い、収量が上がらない、労力が足りないなど厳しい意見が聞かれました。しかし、その言葉の裏には、もっと収量を増やしたい、もっと高く売ってほしい、ブロッコリーで儲けて、少しでも長く続けたい。という思いがあります。

本プランに取り組むことで、単収向上や経費削減にむけた試験を充実するなど生産部活動を活性化していきます。また、ブランド強化により販売単価をあげていきます。さらに、作業受委託体制の構築を進め、労力不足や労力負担の軽減を図っていきます。このような取り組みにより 10 年後にやめようと考えている方の何割かはブロッコリー栽培を継続されるはずです。さらに、新規就農者の育成・確保の取り組みを進め、新しい仲間を増やしていきます。これら取り組みにより、現在 400ｈａある栽培面積の維持が図れるものと考えています。

5 年後、10 年後にも大山ブロッコリー®を栽培している方がきらきら輝き、生産者も、生産部も、ブロッコリーにかかわるすべての方が WIN-WIN-WIN となる産地を目指し、農家・関係者でがんばっていきます。